

雪村筆「茄子図」

吉川英治

青空文庫

画でも書でも掛ければその壁にはその作者が存在する。つまり一個の客と自分との同棲の状態がおこる。だから書斎掛けの幅には、自分と異質を感じるようなものはがまんにも下げておかれない。

いくら名画でも余りきびしい堅い作品は窮屈である。といって浮世絵の濃艶も困るし、妙にくだけて洒脱めかしたお客も少々、小うるさい。気にならない水墨などがよく、そして、ふと眼をやったとき、何か無口なうちに話し合えるような画でもあれば、これは常住坐臥の愉しい友としてつきあえる。

この「雪村筆・茄子図」などは、見得もない朴とつな田舎出の一老翁が、ちゃんと、うずくまっている姿で邪魔にもならない。しかし仔細にみると、二箇の大茄子の重量感といい、花落ちの実や花の異様なモザイク風な描線の組み方といい、尋常でない画人の風戯であることはすぐわかる。

雪村は、雪舟に私淑し、足利末期の周文とか芸阿弥、真阿弥などにもならぶ、独自の画境をもった奇才だといわれている。けれど彼は当時の東山文化に棹^{さお}さした五山の画僧でもなし、都会画家の一人でもない。むしろそれらを白眼視していたかも知れない僻地の田舎

画師だった。佐竹氏の族で、常陸国久慈郡の人というが、画歴も生涯もよくわかっていない。だが旧佐竹家蔵の「風浪山水図」そのほか、いくたの作品は彼を不朽にして来た。とくに院体風の花鳥図に名作がある。

ところでこの「茄子図」はそんな正面切った雪村ではない。畑作りの余戯みたいなものだ。私にはそれが一そう親しめる。第一買った値だんも戦後だが安かった。しかもあとで函底の書付類をみたら、岸田劉生の旧蔵であることがわかった。そして速水御舟がこの茄子図の構成をとって、べつに自己の茄子図を描いたともいわれている。そういえば、どこかでこれに似た御舟の茄子図を観たことがある。

それとまた、横山大観も雪村が好きだった。で、その生前に、私の、も一ツ持っている瀟湘八景図を携えて、いちど大観を訪ねようではないかと、友人の脇本楽之軒氏とよく言い合っているまに、それは果せずに大観は逝ってしまった。大観と雪村とは、似ても似つかぬようであるが、郷土を共にしている同田同耕の関係だろうか、私には、その二人の肌合いや画臭のうちに、古人今人もなく、どこか共通なものがあるように思えてならない。

——この枝もたわなにブラ下がっている二箇の大茄子の、一ツは大観、一ツは雪村かと、頬杖つく私には、いつも眺められて来るのである。

（昭和三十四年）

青空文庫情報

底本：「吉川英治全集・47 草思堂随筆」 講談社

1970（昭和45）年6月20日第1刷

入力：川山隆

校正：門田裕志

2013年5月4日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

雪村筆「茄子図」

吉川英治

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>